

野沢スキー行きの反省

0期 田村 昭夫

皆の前で「これぞ真のスキー術也」とカッコイイところを披露する筈でしたが、悪条件が重なり御期待に沿えなかったことを陳謝いたします。

その原因は「シルバー割引」のリフト券でありました。六十歳以上割引と云う甘い誘惑につい乗って、ゲレンデの上に運ばれてしまったのが失敗でした。私のスキー術は純粋培養型でして、以下の条件が整わなければ作動しないのです。

条件一、緩斜面であること

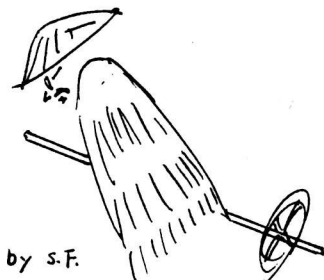
条件二、平滑で新雪が十センチ以下であること

です。通常はこの二つの条件を求めて、スキーを背負ってゲレンデをうろつくのです。

それが急に高い所まで一気に運ばれたので、私はパニック状態になってしまいました。スキー博物館入りの年代物のスキーは全くその機能を失いました。お見苦しい姿を皆様の前で曝した背景にはこの様な理由があったのです。

帰りの車中で、11期の青柳君はさかんに、私のスキー用具の博物館寄贈と、カービングスキーへの履き変えを勧めてくれましたが、長年履き慣れたスキーに別れるのは辛いし、如何にすべきか悩んでいる昨今であります。

いっそ一本杖で、蓑を着て滑るのも悪くないとも思います。



いつも、「私信」の部分もご紹介すべきかどうかと迷います。私信だから省くのがマナーというものです。

でもでも、こっちの方が私の好きな「心」が漏れ出ている、その方のお人柄が出ているなあと思えることがあるんです。首がかかるとか、家庭不和の種になる内容ならともかく……。

よって私信部分も掲載しました。逆鱗に触れました場合には、次回スキー合宿にてご報復下さいませ。かしこ

編集長 舟田様

遅れましたが、「やまざと」原稿をお送りします。

社内文書以外の作文は本当に久しぶりで、編集長からの文書が届いて以来、寝苦しい日々が続いたのでした。

何とか仕上げましたので、ご確認のうえ、いかようにも料理して下さい。

原稿を書くに当たり、最近の「やまざと」を読も直してみました。

ワングル40年の歴史が、実に多才で有為な人材を輩出しているさまを再確認されます。その彼等を束ねて、「やまざと」を作り上げる編集長の力業には頭が下がります。

野沢では、カービングスキーに初乗りした嬉しさから、やや身勝手に振る舞わせていただき、反省しています。でもカバーしてくれる気安い仲間がいることがなせる業、お許し下さい。

来年も野沢で会いましょう。その前に、40周年総会がありますね。行事の詳細が決まりましたら、お知らせ下さい。

最近の世の中の動きを、特に政治と金融界の動きを見るにつけ、やはり問題はシステムではなくて、“人間”なのだと一としみじみ感じます。

そして、私には“ワンゲルとそこにいる素敵な先輩と後輩”があることの幸せを、また感じ入るものです。

さあ、本気でアルプス行きを考えよう。

98年4月26日

青柳 健二



カービングスキーの勧め

(OBスキー合宿 in 野沢 報告書)

11期 青柳 健二

就職した年のアルバムに、三枚の白黒写真がある。すでにカラー写真が普及し前後の写真がすべてカラーの中での白黒であるところがワンゲル的である。メモには「46.2.11 野沢温泉 OBスキー会」まだ大学に残っていた工学部のワンゲル同期の連中がスキーしたさに開いたイベントである。同期だけでは面白くないので、KUWV10周年記念山行で懇意となった先輩達にも案内状を出して「OBスキー会」とした。写真は、民宿前と上の平ゲレンデでの集合写真と、私がウエーデルン?の練習をしているスナップの三枚である。

妙高をバックにした写真には、15名。同期が8名。後輩1名。そして高田(4期)・大橋博(5期)・木下(現姓村田7期)・伊藤俊成(9期)・寺本(10期)・吉田憲正(10期)の6名の先輩方が写っている。民宿前の写真には、高島(3期)先輩の顔もある。この時高島先輩は、たしか出張帰りにスキー一式を新調して参加された

と記憶している。今ベルリンにおられると聞く高田先輩は、華麗なスキーを披露された。専門は自転車の大橋先輩は馬力のスキーだったか。同期の連中のレベルは、似たようなもので、それでも若栗・萩平のスキー合宿育ちで、シュナイダーコースにも根をあげず楽しんだものだ。まだ、ゴンドラの無いところで、日陰ゲレンデから上に登るためのリフト待ちがゲレンデを縦断して、上の平ゲレンデまで登るに2時間以上もかかったことも楽しい思い出である。

さて、97年12月「やまざと 8号」に、「OBスキー合宿 in 野沢」の案内をみた。金大ワンゲル創部40周年行事第一弾!とある。よく企画してくれました。しかも野沢でである。あの時以来、野沢はご無沙汰であった。我が11期には、KUWV10周年を挙行し、OB会の道筋をつけたとの自負がある。そして、5年ごとの周年行事には、可能なかぎり参加してきた。この企画は、天の声である。もちろん参加を即決した。年があげ、E-Mailにて参加を伝えた。こうして、私にとって27年ぶりのOBスキー合宿が、始まったのである。

98年は、私の中の“スキーの虫”が、年初

からうずうずとうずいていた。

1月の8日と15日、二週続いて東京に大雪が降った。積雪実に20cmを超え、観測史上最大級の大雪であった。帰宅時間を襲った8日の大雪では、電車が混乱し、3時間かけて自宅に帰ったのだった。今年、金沢の市内には、ほとんど積雪が無かったと聞く。これもエルニーニョの影響なのだろうが、この雪に、わくわくしたのは、私だけではないだろう。長野オリンピック関係者には、天の恵みで雪不足が一気に解消し、2月のあの感動のドラマへと繋がったのである。

わが故郷信州長野でのオリンピックは、存分に私の中の虫を楽しませてくれた。

里谷の大金星に始まり、清水・岡崎のスケート、そしてスキージャンプ陣の大活躍。唯一健司の不調が残念であったが、ドラマとしては、出来すぎの2週間であったと言えるだろう。

オリンピックの閉会式の日から3日間、私は赤倉にいた。就職してからのスキーの師匠役である、Tさんとの、これも8年ぶりのスキーであった。80年代、ほぼ毎年志賀をベースに、一緒に滑り刺激を受けた大先輩である。自宅のある神戸芦屋に戻られてから、久しぶりでどんな滑りとなっているか、大いに楽しみであった。

さすがであった。今年63歳。衰えを知らない華麗な滑りで、赤倉チャンピオンコースを、常に仲間6人の先頭を滑り降りていた。オリンピックの熱戦の残り火もあり、私の中のスキーの虫は、熱く燃えた3日間であった。

じつは、Tさんの滑りには秘密があった。スキーである。昨シーズン新調したものという。負けた。と思った。2つの点にである。1つは、60歳を超えて、スキーを新調した若さに対してだ。阪神大震災の年は、さすがに1年スキーを休んだが、再びスキーをはいて、まだ5年から10年はやれると思い新調した—とのことであった。そして、そのスキーだが、これがカービングスキーであった。この数年程前から市場

に出だし、いまやスキー界を席捲している最先端のスキーである。常に流行を先取りする、この先進性に対して脱帽であった。

この数年、自分の滑りに壁を感じていた。これは、体力の衰えとして、仕方のないこと、と一面では受け止めていた。そう思っている、怠け癖もあり、その分トレーニングをした訳でもない。今、関西の某銀行の非常勤監査役であり、週一度は、ゴルフコースに出て、スキーは、カービングスキーを愛用する—T先輩との勝負は、結果が見えていたのである。

自分の滑りの壁を破る鍵は、スキー板にも有りそうである。と気がついた。こうなると、もう止まらない。自宅近くの図書館で、スキージャーナルの、カービングスキー特集を解説する。そして、スキーショップ回りである。そして、買ってしまったのである。新宿のスキーショップで、心に決めていたスキーを見つけた。決算バーゲンであり、まあ高くない買い物と、結果は退職金を担保にした、衝動買いである。3月初め、OBスキー合宿まで、あと二週間という時であった。

ここで、カービングスキーについて解説する。CARVE=切る、彫る。カーブ=CURVE=曲がる—ではないので念のため。

トップ、テールとも従来のスキーより幅広いのが特徴。結果として、スキーのサイドカーブが非常に深くなる。カービングスキーとは、「スキーのサイドカーブの“深いえぐれ”を利用して、ターンをキューインと切っていきやすくしたスキー」と説明される。ズレをごく少なくすることで、ズレることによって起こるブレーキ現象がないから非常に高い速度感を味わえるのが特徴である。

カービングターンというスキー技術は、すでに10数年前からあった。オリンピックでは、その優劣により勝負は決まった—と見られるブ

ロのテクニックが、誰でも手軽に楽しめるようになった。さらに、初級者でも簡単に曲がることを覚えられるスキー。幅広いトップにより、スキーを傾けるだけでエッジが雪面をキャッチ。あとはサイドカーブに沿ってカービング。これで、どんな斜面も滑れてしまう。———ということである。

カービングスキーは、4種類に分類される。

①レースカーブ ②ピュアカーブ ③イージーカーブ ④ファンカーブ スキーの形状からすると、①→④ほど、サイドカーブは深くなり、長さが短くなる。初級者には、③がお勧め。中上級者には②を、というのが一般的だが、スキーの性能により、また、楽しみ方により、自分に合ったものを選べば良い。なお、スキーの長さは、幅の広い分短くてよく、身長プラス・マイナス5cmを目安とすると良いようだ。

さて、スキー合宿の本題に進もう。

待望の98年3月20日(金)は、雨であった。スキーを新調し、一日早く乗り込んだ「OBスキー合宿 in 野沢」であったのにーである。同期の森川氏と二人、池袋から夜行バスに乗り、早朝6時前に野沢に着いて、目一杯スキーを楽しむ予定だった。この時ほど、雨男?の森川を怨んだ事はない。

今回のOBスキー合宿、なぜか予想より参加者が少なく、東京から、これも同期の上村氏を入れて3名、金沢から後輩連5名と家族5名。そして会津から0期の田村御大の計14名となった。世の中不景気で、3月の期末月ということもあり参加者が限られたのか。でも、田村御大や13・15期の倉谷山小屋酒場常連の辰野・奥名・松林・舟田の金沢組とは、KUWV35周年大会以来の邂逅であり、大いに楽しみとしていたのだ。そう言えば、35周年も台風による大雨で、白山山行が中止となったのだった。

民宿に入り、一眠りしても雨は止まなかった。雨はより強くなり、雪が溶けてしまわないか心

配になるほどで、止む無く沈殿を決める。

でもスキーが出来なくても楽しめるのが、野沢の良いところだ。お勧めは、外湯巡りと日本スキー博物館である。温泉は、「クアハウスのざわ」にいった。今や全国のいたるところにあるクワハウスであるが、ここが元祖で本物だ。だが森川は、飲酒コーナーがなく、入浴後のビールが飲めないと文句を言った。相変わらず“本物”が解らない男である。

「日本スキー博物館」は必見である。スキー発祥から今年の長野オリンピックまでの、スキーの資料に満ちており飽きることが無い。特に、スキー板、スキー靴、バインディングの歴史が現物で確認出来るのが楽しい。大学1年の時に、初めて買ったスキーから現在まで、自分のスキー史を確認できた。また、昭和5年、野沢温泉でのハンネス・シュナイダーの滑降写真には感嘆。すごいジャンプターンで、スキーの技術は、スキーの性能の進歩ほどには進んでいないのではと思わせる。博物館を出る時には、雨は小止みになっていた。天然記念物の麻釜を見て、夜の楽しみに信州ワインとつまみを買って、宿に戻った。

民宿ではなくて「リゾートハウスふるさと」の夕食は豪華であった。野沢が好きだと言う森川の理由が、野沢ではどこに泊まっても飯が上手いであり、相変わらず単純なやつだと思うが、これは真実であった。夕食後お茶を飲んでいるところに、突然田村御大が現れた。会津から普通電車を乗り継いで今着いたとのことで、いかにも田村さん的な出現で、嬉しくなった。さっそく田村さん持参の吟醸酒で盛り上がったが、宿の人に「食堂では持ち込み禁止」と注意され、部屋に戻って心おきなく一杯やる。まあ、スキーは出来なくても、楽しい一日であった。

翌21日(土)と22日(日)は、曇り時々小雪・標高千m以上ガスの中であった。結局この野沢では一時も晴れなかったのだ。

早朝にスキーバスで着いた上村を加え、同期3人それでもゲレンデに飛び出した。田村さん

と金沢組とは、お昼に長坂ゴンドラ終点のやまびこ駅のレストハウスで待ち合わせる事にする。ガスの中であつたても、一番高いところまで登らないと気が済まないのがワングルので、毛無山山頂下のやまびこゲレンデまで行く。視界は30m以下。でも標高1600mにあるゲレンデは、前日の雨の後、うっすら積もった新雪もあり、3月のこの時期としてはバッチリな雪質であつた。

上部はややアイスパーンがかったこのゲレンデで、私はカービングスキーの威力と楽しさを思う存分に味わうことができたのである。その報告とともに話を進めよう。

前回の赤倉まで履いていたスキーは、83年から実に15年愛用したものだ。HEADホワイトスペシャル。この間毎年滑ってはいたが、年間滑走日数が5・6日程度で、スキー本体の傷みも少なく買い替えられずにきた。しかしスキーを変えるとこんなに違うものかと実感したのである。

新スキーのカタログ宣伝文を記すと、

「SALOMON X-FREE 09。扱いやすく、乗りやすく、楽しく、面白い。一台でもこなす頼もしいモデル。」

クロスフリーと読む。いろんな要素をクロスオーバーするの意で、圧雪された整地はもちろん、ハードバーン、コブ斜面、また新雪や深雪など

あらゆる顔を持つ雪山すべてをまるごと楽しんでしまおうという発想のもとで開発されたと言う。まさに、我々ワングルスキーヤーのためのスキーだーと、この宣伝文に参って買ってしまったのである。

このスキーの特徴は、サイドカーブにある。一般のカービングスキーと違いテールが細めの、Yプロフィールと呼ぶ形状となっている。ターンの導入がスムーズにいくようトップはワイドだが、テールを細めにしターンの抜けがスムーズになるようにした。また、ターンをスライドさせやすいことでコブ斜面でもスムーズにコントロールできるという。カービングスキーの楽しさに、従来のスキーの味わいもある、カタログ上では、満点である。サイズは、身長よりやや短い166cmとした。さて、このスキーの実体験はいかに！

結果は、「十分に満足。」と言えるものであつた。ただ、15年乗ったスキーとの比較となるので、このスキーの性能が本当にそうなのか、実は難しところだが、扱いやすく、乗りやすいのは実感できた。

先ず、新しいからでもあるが、エッジが切れるので、アイスパーンでもスキーがぶれず安心して乗り切れる。軽いエッジングでスムーズにターンにはいれ、しかもスピードをあまり減速せずにターンを仕上げる事ができる。これがカービングターナーと実感した。全長1500m、



平均斜度19°、最大斜度25°のやまびこコースを、ほとんど疲れを感じず、ノンストップで滑り切ることが出来た。これは、自分にとっても新鮮な驚きで、少し若返った気分になったものだ。

午前の仕上げに、全長5キロのスカイラインコースを降りる。スキーの短さが、この尾根コースでは威力を発揮する。爽快なロング滑降を十二分に楽しんだ。

予定どおり、長坂ゴンドラ終点の「レストハウスやまびこ」で田村さんと金沢組の6名に合流。この時から、翌日の1時まで、実質わずか一日ではあるが、本当のスキー合宿が始まる。

天気は相変わらずで、ゲレンデはガスの中、でも雪質の良いやまびこコースでほとんど滑った。調子が出た私のペースは、もう誰にも止められない。リフトの上が休む場所、バンバン滑るのが流儀で、田村先輩と奥名君、舟田女史は、少々根を上げたのではないと思う。(実際、田村先輩と奥名君は、翌日を温泉ツアーに切り替えた。)調子にのって、スピード競争を仕掛け、辰野君ちの友祐君とレースになった。結果は書かない。ただ、20歳前の滑降系の飛ばし屋と、本来は華麗な滑りを旨とする熟年が、スピード勝負の結果にこだわっても無意味なのである。

親父さん以外の人間に目一杯滑らされて、松林君ちの美乃里ちゃんは、しっかり上達して、いつの間にか親父さんを超えていた。これが若さである。

いつも最後にリフト下に到達していた舟田さんには、先輩の偉大さと身勝手さを、思い知らせたことになったのでしょうが、良く耐えてくれました。翌日には、上級者以外滑降禁止とコースの入り口で音声案内しているスカイラインコースを滑らされ、得意のボーゲンで、無事完走されたのは立派でした。

さて、田村御大の滑りですが、これはもうス

タイルから偉大です。実は、あの27年前の写真に写っていないので、記憶が曖昧になっていたのだが、あの時のスキー合宿に、田村さんも参加されていたとのこと。そしてその時と、まったく同じスキーで今回も滑っておられるのでした。竹のストック、本皮にバックルのスキー靴、ワイヤー式金具付のスキー板と、昨日見た「日本スキー博物館」展示品そのままなのでした。かのトニー・ザイラーと会津のスキー場で一緒に滑ったという田村さん、その時も同じスキーで滑り、ザイラーを感嘆させたとのこと、これは十分に自慢する価値のあることです。(やまざと8号、P28参照)

しかし、ニッカボッカのスキーズボンでの滑降は、そのスキーにふさわしいテレマークスキーで、我々にしっかり着いて滑ってくれました。じつは、いまカービングスキーと同じように、その道の人に注目されているのがテレマークスキーです。アウトドアブームから、山スキーが静かなブームとなっているのですが、山スキーの世界では、すばらしく威力を発揮するテクニックなのです。

ただ、圧雪車で整地したゲレンデが主流となった日本のスキー場では、古くて新しいテレマークスキーの不利は否めません。スピードで負けるので、仲間との滑降では遅れてしまう。ゲレンデでは、私のカービングスキーの方が絶対有利なのです。帰りの電車の中で、カービングスキーの良さを訴え、赤倉でのTさんとの体験を話したことで、来年田村さんが、カービングスキーに乗り換えるか、実は注目しています。

このようにして、スキー合宿は楽しく進んだのだった。野沢に詳しい辰野君と森川が、自然体でリーダー・サブリーダーの役を引き受けてくれた。久しぶりの集合なのに、自然にチームワークが組めてしまい、何とも言えない開放感で、大きな山の素晴らしさの中で、思う存分遊

んで楽しめてしまうのが、ワングル仲間とのスキーの楽しさである。

やまびこゲレンデのリフトが止まる時間まで滑り、シュナイダーコースを降りて宿に戻った。近くの中尾の湯が満員で、新田の湯まで足を伸ばして疲れを癒す。

夜は、また豪華な夕食を味わい、家族で自炊民宿に泊まった19期早川君も加わり、部屋でKUWV野沢総会となった。皆が持ち寄ったアルコールが、話を弾ませる。昨日仕入れたワインが入ると、田村ワインシュタイン先生の独壇場となるのは、必然である。とにかく記憶力抜群で博識だから、聞いているだけでも飽きる事がない。ウイスキーの銘柄となっている、オールド・パー爺さんは、百歳を超えてで子供を産ませ、152歳まで生きたのだそうである。森川の持ってきたオールド・パーのラベルに、152という数字が書いてあり、どうも嘘ではないようである。

今時は、銀行員でなくても、金融危機だ、ビックバンだと、そんな話題が中心になるものだが、文化系と理科系人間が適度に混ざったワングル人との話は、仕事も俗世も忘れさせて精神衛生上こんな快適な事はない。期待どおり、十分に気持ちの洗濯ができ、リフレッシュできて、楽しい夜が暮れていくのでした。

翌22日も、天気は好転しなかった。でも、8時45分柄沢リフト下集合と自分で決めたのだから約束は破れない。中尾の湯の朝風呂に入り、体調を整え、気合を入れ直し、9時前には、ゲレンデに出る。そして、半日券が終わる1時まで、たっぷり滑って、今回のスキー合宿は終わったのであった。チャレンジコースをおりて、ユートピアゲレンデでの国際デモンストレーター選手権大会を横目に見て帰路についた。デモ選の滑りに歓声が上がるコースの上方、シュナイダーコースの尾根に日がさしてきて、どうや



ら我々のスキー終了に合わせて、天気は回復に向かい、明日は晴れるようである。

唯一、天気に恵まれなかったのが残念であった。カービングスキーにも課題が残った。私のX-FREEは、ズレ系の技術にも対応するスキーゆえ、特別にカービングを意識せずにも滑れてしまう。カービングの特性である“彫る”感覚を追求し、ターン時にスキーを走らせ推進力を引き出すテクニックの追求がおろそかになっていた。また、コブの斜面でのスキー体験の時間が取れなかった。課題が残れば、来シーズンへの楽しみも増えるというものである。

ゴンドラの中で、このスキー合宿を今後も続けてくれるように、企画・実行委員長の舟田さんをお願いした。東京からは、金沢はいかにも遠い。北陸以外に暮らすワングル人にも、気軽に参加できる行事として定着させて欲しいと思う。場所は、野沢が良いだろう。温泉があつて、雨が降っても楽しめる場所があり、やはり食事が上手いのが良い。田村さんが推薦された今回の宿、「リゾートハウスふるさと」を定宿にしよう。今年は、オリンピックもあり、日程が遅くなってしまったが、もう少し早めに設定したら皆が参加しやすくなるだろう。

そして、やはりカービングスキーは、お勧め

である。楽に曲れるスキーとは、疲れが少ないスキーであり、年齢を重ねたスキーヤーには絶対に良い。いや、市場原理から、この一二年で、すべてのスキーはカービング流のスキーとなってしまうだろう。カービングスキーの性能は、今後もアップし続けるのは間違いないが、パソコンと同じで、待っていても限がない。トレンドは早くつかみ、それを楽しむ時間を長くするのが正解である。買う時期を選べば、バイディング付で、予算は6万もあれば十分な性能のものが手に入るはずである。

今年スキーを新調した。当然あと10年はスキーを楽しまなければならない。その後も、体が動く限りスキーは止められないだろう。偉大なる二人のT先輩がいる限り、スキーを止める理由が無いではないか。

この原稿を書き終えて、今シーズンの私のスキーは終わったようである。何とか、今シーズン中にもう一回滑りたいと思っていたが、その機会が無かったのは残念である。

さあ、来シーズンに向け、カービングスキーを完全にものにすべく、体調を整え、筋力の強化にも励むことにしよう。スキーの性能に助けられるだけではだめで、やはり、スキーを完璧にコントロール出来る体力があれば、もっと

楽しくなるのだから。

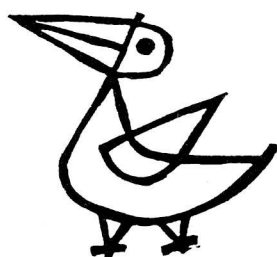
来シーズンも野沢でスキーをしよう。「OBスキー合宿 in 野沢」の継続は、ほぼ決定となり、田村さんは、愛用のスキーを「ふるさと」に預けて帰られたのだった。次回は、より多数の仲間が参加されることを期待したい。

毎年テーマを決めて開催したい。次回は、「舟田女史のボーゲン卒業させる会」としようか。それとも「田村御大にカービングスキーを教える会」としようか。

そうだ、田村先輩に、スイスアルプスでのスキーを誘われていたのだった。前回行った時に、アルプスの山小屋のコック長に、ご飯の炊き方を教授してきたとのことで、もう一回行って、教えたとおりちゃんとご飯が炊けているか確認したいのと言う。

さすがに即答を控えたが、アルプススキーは私の夢でもあり、真剣に考えてみよう。田村さんと一緒なら、トニー・ザイラーとも共に滑れるかも知れないではないか。

98年4月 雨の日曜日



完

舟田様

15期 松林 知一

たくさんの写真をお送りいただき、ありがとうございました。本来なら、受け取ってすぐお礼のお返事を差し上げるべきところですが、如何せん、つつい電話をするのも気が引ける状況でした。お察しくささいませ。

「仕事」とあればなおのこと、締め切りが迫らないことにはワープロに向かえないのはやむをえないところと、ご理解ください。ましてや宇野さんのように、娘に押し付けようにも、頭から拒否されてしまつては、打つ手もなし。とうとう、締め切り前日4月19日

の午後11時半を回ってしまいました。

いつもいつもおなじ人の原稿ばかり載っていると飽きられますよ、新人ライターの発掘に努めましょうよ……と、弁解の前置きをだらだら述べつつ。

さて、

スキー合宿なんて、何年ぶりのことでしょうか？ 指折り数えてみると何と26年ぶりでした。相変わらずのへっぴり腰で“足前”に進歩のあとは見られないのですが、この歳になってなお「スキー合宿に参加しよう」という意欲が残っていた自分をほめてやりたいと思います。これもあの当時、スキー合宿にだけは真面目に参加し、口の悪い先輩のしごきに耐えてきたおかげでしょうか。

四半世紀前のスキー合宿は若栗スキー場でした。若い人たちは知らないでしょうね。今は「白馬乗鞍国際」と名前が変わっていますから。樺池高原のすぐ隣にひっそりと隠れている、全然有名でないスキー場が当時のワングルのホームゲレンデでした。圧雪車も通っていない早朝、民宿からゲレンデまでラッセルして通ったこと、民宿に帰って食べたぜんざいのおいしかったことが、今でも忘れられません。

26年ぶりのスキー合宿は野沢温泉に変わりました。ぜんざいがなかったのが唯一残念でしたが、代わりに温泉が付きまして。ゲレンデは、石川県内のスキー場しか知らない身には文句なし。さすが、オリンピック会場になっただけのことはあります。3月下旬だというのに美しい樹氷が一面に咲いていました。

今こうしてワープロに向かっていて、あんな楽しいスキーは何年ぶりだったろう、と思

います。本当に26年前のスキー合宿以来だったような気がします。当時と変わらぬ先輩がいて、当時と変わらぬ仲間がいて、そして当時と変わらぬ自分がいました。26年の時間の流れを一気に逆戻りしたような、無心を楽しみひとときでした。

そこで、現役の皆さんにもお勧めします。数あるワングルの活動の中でも、スキー合宿の楽しさはまた格別です（重たい荷物を担がなくてもいいだけでも）。だまされたと思って、スキー合宿に参加しましょう。幸い、今回の野沢温泉でのスキー合宿は今後もOB会の恒例行事として継続されていくようです。民宿ですから費用もたいしたことはありません。交通も便利です。現役の合宿とドッキングするのもいいかもしれませんね。

問題は時間と気力です。時間の方は私の経験から言うと、なんとかなるものです。最優先事項に指定しておけば時間は作り出せますし、無理をしてでも作り出さなければいけないという気になります。むしろ気力の方が問題です。時間をつくるにも気力が必要です。気力が無くなってしまったら、その時は自分の人生を終了するときだと腹をくくって自分を奮い立たせるしかないかもしれません。でも、一度参加してその楽しさを知ってしまえば、そんな大袈裟なことは言う必要もなし。来年は皆さんも家族を連れて、もっと大勢で集まりましょう。年に一度のスキー合宿は、若返りにも効果がありますよ。

(了)

野沢温泉OBスキー合宿 行状記

15期 奥名 正啓

野沢温泉は今回が2回目である。

前回、つまり最初に訪れたのも、もちろんスキーをする為である。今回もOBスキー合宿と言うくらいだから、スキーの為である。

けれども違うのは、スキーの為だけではないというところであろう。そう、今回は頭にOBという文字が燦然と輝いているのである。いやいや、野沢温泉の「温泉」という文字の方が私には大きく輝いて見える。

つまり、優先順位はまず野沢温泉、次にOB合宿、その次にスキーとなる。

第1日目。朝早く（家を出発したのは4時15分。途中で節ちゃんを拾って西部緑地公園へ5時ちょっと前着。その時、既に松林は待ち状態。しばらくして我々を運んでくれる辰野カーが到着。まだ外は暗い）出発したものの、車の後ろでうとうと眠ったり、お握り食べたり、果ては豪華特大手作りレタス巻ポテトサラダまで食して、ゆったり気分。朝のはよから運転しどおしの辰野さんには大変申し訳なく思っています。
ありがとうございます！
でも運転を楽しまれているようでもあったので、来年もお願いしようか。

そんなわけで移動に費やされるエネルギーを温存できたので、野沢温泉「ふるさと」に到着後すぐさま支度してゲレンデへ飛び出していきました。

民宿は柄沢ゲレンデのすぐ前にあり、リフトまで徒歩5分。距離にしたら50mほどしかないが、歩きにくい靴、重いスキー板、それに何とんでも上り坂。リフト券売場でひと休み。

リフト券の料金表を見上げながら、各自しばし思索する。

「半日も滑れば十分かな？」

「明日もあるし、今日はまだ午前だから2日券

という手もある」

「でも明日は温泉めぐりも捨てがたい」

「4時間券で、あとはゆっくり酒でも飲んでいようか」……

結局1日券を購入。

ここではリフト券のバリエーションが多く、時間を軸にすると、1回券から始まって、午前券、午後券、4時間券、1日券、2日券、3日券、4日券まであり、さすがにスキーの本場だけある。

さらに、普通は時間の軸しかないのだが、ここでは年齢軸まである。子供、大人、そして、なななーんとシルバーがあり、1日券は1600円もお得。

田村教祖はリフト券売場の窓口に向かって勇躍「シルバー1日！」と声を張り上げた。しかし皮肉にも、これが後に悲劇の種になるとは、その時は夢にも思っていなかった。

金沢組+田村教祖一同、スキーを履いていざ出勤。ゲレンデの下の方は季節柄既に雪はぐしゃぐしゃで気持ち悪い。そんな柄沢ゲレンデには見向きもせず、連絡リフト乗場へ直行。そして悲劇の幕が開いた。

スキーの本場だけあって、リフト乗場は切符切りおっさんがいる訳でなく、自動改札になっている。自動改札といっても、都会の駅よりはるかに進んでいて、いちいち機械にパスを突っ込むのではなく、非接触式の読み取り装置にパスを近づけるだけで遮断機が上がる仕組みになっている。一般であれば、無言の通過儀礼となるのだが、田村教祖が通過すると

「シルバーです！」の大音声か響きわたるのである。

悪用防止なのであろうが、リフトに乗る度にこれをやられては、ちょっとばかり気分悪いのではなからうか。わずかの悪用者を防ぐ為に、多くの善良な利用者の気分を害しては、かえって逆効果といえはしないか。ここでも相手の立場でものを考えない拝金主義をかいま見たようで、情けなかった。

さて、柄沢連絡リフトを降りて林道を下る。



途中、ジャンプ台の下をくぐって丁度ジャンプの飛び出し地点辺りを通過する。公認ジャンプ台だそうだが、ひどく小さく見える。それでも、ジャンプ台の上に立って下を見下ろせば、まっすぐ落ちて行くようなスロープに見えるに違いない。

林道が終わると向林ゲレンデに出る。このゲレンデを斜めに横断して林のわずかな切れ目を抜けて長坂ゲレンデに向い、その最下部からゴンドラに乗って上の平に行くことになっていた。ところが、田村教祖は向林ゲレンデを一人気持ちよさそう滑り下りて行かれ早くもここではぐれてしまった。

我々はゴンドラで上ノ平へ。そこからもう一つリフトに乗ってやまびこゲレンデへ。さすがにここまで来ると、季節は一気に2ヶ月程前に戻ったような気になる。

天候は悪くはないが視界は悪く、ほとんど前の状態がわからない。スキークの腕前が今一つ（スキーは急には止まれない、スキーは急には曲がれない）の私にとっては、ひたすら前の人について行くだけで、楽しむ余裕はない。

昼食時には田村教祖と合流。さらに先発隊11期の青柳さん、上村さん、森川さんと合流。し

ばらく一緒に滑った後、私の「もう帰ろう」も虚しく、毛無山の頂上にclosedのテープが張られるまで滑っていた。最後に頂上にいた頃には疲れ果てて体中痛くて、立っているのもやっという状態だった。下手な為に、他の人が使うエネルギーの倍以上使っているに違いない。腕前と疲労は反比例する。

それに引き替え、11期の皆さんは、朝からやっているのに元気一杯。それだけ上手いということだろう。最後まで3人で競い合っていた。特に青柳さんと森川さんの壮絶なバトルは、6万円対1万2800円対決として、ワングルスキー史に刻まれることだろう。それほど腕前を持っているんだから、リフトの乗り方を練習しておかないといけませんよ、青柳さん!!

最後はビギナー用林道コースさえ、ままたぬ状態で降りてきた私でした。

第2日目。昨日の疲労が回復しないまま迎え、スキー組を送り出した後、しばらくビールを飲みながら部屋で横になる。窓から見上げると、ガスが随分低い所まで下りてきていて、昨日より視界が悪そうだ。

タオルを一本手にして宿のサンダルを履き、

温泉巡りに出掛けた。一番近い所は「中尾の湯」。ここは、野沢温泉の外湯14ヶ所の中でぽつんと南の方角の離れた所にある。建物は比較的大きく、しかも新しい。中に入ると畳1枚分程度の履物を脱ぐ土間があり、それを持ったまま脱衣場へ、と入っても、脱衣場と湯殿とは1m程の高さの仕切があるだけで、別の部屋ではない。この浴槽は二つに分かれている。今回入った外湯の中で、浴槽が分かれていたのも、木でできていたのもここだけだった。

ここを起点として、北へ北へと進む。2、3分歩くと、大湯から伸びる温泉街のメインストリートにぶつかる。この辺は繁華街とは程遠く、大きな商店街はなく、民宿もまばらにあるだけで見通しがよい。野沢は、東京から近い湯沢や志賀高原等によく見受けられる高層ホテルやリゾートホテル等というものが一つもなく、狭い路地に民宿がひしめきあっている。ワンゲル向き！

すぐ右に曲がって野沢温泉アリーナを回り込むように坂を登っていく。少しなだらかになった所で左折するとすぐ左手に「秋葉の湯」がある。先程の中尾の湯に比べて、ここはかなり小さい。建物はほぼ立方体で、建物自体も他の外湯と違ってただの小屋といった感じ。私が出てきた時にも、2、3人連れの人が、戸の前で躊躇していた。どこにでもあるアルミサッシの戸をガラガラと開けると、風よけらしい土間があり、そこから男湯と女湯に分かれている。中尾の湯は向かって右側が男湯だったが、ここは左側が男湯。男湯は右側が、私のイメージなのだがそうではないようだ。ちなみに、河原湯、滝の湯なども左側が男湯になっていた。狭いながらも脱衣場と湯殿は完全に分かれていて、普通の銭湯と同じ仕組みになっている。タイル張りの正方形の浴槽は4人も入れば一杯。洗い湯も水道のカランが3つほどしかなく、しっかり洗える程の空間はない。

全ての外湯を踏破するつもりでいたが、この後「松葉の湯」「河原湯」「滝の湯」と進み、最北端へ到達した時には疲れ果てていた。あわ

よくばスキー博物館まで行ってみようかとも思っていたが、最後の「滝の湯」への上り坂は相当なもので、ここから更に先へ行く気はなくなっていた。どの外湯も総じてそうなのだが、とにかく湯が熱い。源泉が90度以上もあって、ちょっと油断すると、とてつもない熱さになってしまう。この滝の湯は最も小さい外湯の一つで、3人くらいしか入れないし、洗い場といえる場所もほとんどない。誰もいないこの浴槽はほとんど熱湯ではないかと思われる程熱く、足を突っ込んだ途端、その部分だけがみるみる真っ赤になってしまった。さすがに水を差さないと、体全体をつけることはできなかった。

こうして外湯巡りを締め括り、お土産屋の建ち並ぶメインストリートを真っ直ぐ、宿に向かって帰ってきた。途中「十王堂の湯」「新田の湯」を通ったが、横目でちらっと見ただけで、この次来る時の楽しみにとっておくことにした。

どこでも体を洗えなかったので、宿の内湯でゆっくり洗おうと階段を下りて行くと、無情にも「休湯中」の札が揺れていた。

OBスキー合宿 in 野沢

15期 舟田 節子

春の彼岸の連休の 樹氷の華の咲く頃に
気の若い先輩に 騙されて
ヒヤヒヤ滑った スカイライン
の替え歌が、すぐにできてしまった、うんと楽しかったOBスキー合宿。

21日、金沢組は早朝5時産業展示館に集結。辰野さんのエスティマに乗り合わせ。この歳になっても先輩に世話をかける、総甘えの15期勢なのでありました。

この話が湧いたのは、秋の小屋酒場。行こう行こうで決めたものの、結局皆年度末の連休を空けるのに汲々としてしまったそう。やはり学

生時代のような訳にはいかないもの。それでもシートにホッと体を埋めれば、久しく忘れていたあのパーワンに出立する時のワクワク感が甦ってくるのが実感できるのでした。

高速道路でのバンク（路上落下物のボルトの為）、峠の冬期閉鎖のハプニングも乗り越え、「ふるさと」へは10時過ぎ着。田村教祖様のお出迎えを受け、昨日は雨で温泉巡り、その分も滑るぞとゲレンデに先行している11期連とは頂上レストランで昼に待ち合わせとの伝言も受けました。

心配していた雨が止んだかわりに、頂上部はガスの中。それでも、緯度と高度の関係で、素晴らしいブナ林の樹氷が視界を流れていきます。

下とは雲泥の差の雪質。すごくうまくなった気がした…のは最初だけ。勝手のわからない所で迷子にはなれない。必死でホワイトアウトの中を追い掛けるのみ。部活と受験で三年のblankという美乃里ちゃんにちょっと期待(?)していたのに、さすが若さ。1,2本でもうスキーは揃っているではないか! まずい。これでは最下手っぴは私ということになる。気がひけると、ますます腰も引けてくるのでありました。スキー一部だったという友祐君に至っては加速をかけているという滑り方なのでありました。

3本滑った所で昼食。無事11期連と合流。金沢組が9時に着くはずがないとみて、もうスカイラインも滑ってきたとの話。「あれ上級でしょ?」「ここかて上級や。節ちゃんかて滑れる

滑れる」と森川先輩。隣でニヤニヤの青柳先輩。（正解は明日わかる。）ひとしきりの談笑の後、午後の部へ。

教祖様はもちろん竹ストックにバネ止めのスキー。昨日スキー博物館に行ってみたら、同じものが展示してあったそう。それで「シーハイル!」と雄叫びを上げられるものだから、もう目立つこと! 食堂前での記念写真もシーハイルの連呼で、好奇の膨大な視線を浴び、皆モジモジ。ワッゲル教の修行不足に恥じ入ったのでありました。

ガスと広さもあってなかなかコースが頭に入らず、華麗な滑りの辰野さんや先輩方には申し訳なく思いつつも、待ってもらってはあっちこっちと滑りました。純白の樹氷の林を滑り抜けるのは初体験。石川県なら絶対実現しないコースにうっとりしたいのに、ひたすら暴走族（こちに余裕がない）を演じるこの辛さ。賑やかな所へ出てきたと思ったら、そこは広々した緩斜面のゲレンデ。これも野沢なの? じゃあさっきまでは（私にすれば）半分シゴキ。今度は新米の頃のパーワン気分がほろ苦く甦ってくる私でありました。

長い長い林道コースでようやく宿へ。一番近い中尾の湯を浴びてから夕食。快い疲れとビールは饒舌にする。好き勝手を言っては笑えるこの一時を本当に贅沢な時間と思いました。このうち、偉大なる教祖様を初め、11期の青柳先輩、上村先輩、19期早川氏は、私にとって現役時代



には全く面識のなかった方々。そんな方達とも心が通うのは、この何もかもが末世へ走り出している世の中であって、本当に有り難いことと、ますますワンゲル教への傾倒を深めさせるのでありました。

翌日もガスは下がっています。田村さんと奥名さんは、今日は温泉巡りをやるとか。ますます私の下手なのが目立ちそう。

ガスの方は時々晴れ上がって、ようやくゲレンデの配置が納得できたりしましたが、ともあれ半日券で一日分滑ろうという意気込みの方が多くて…。丁寧な指導に定評あるという上村先輩も私の足前にはアドバイスの虫が疼かっていたようですが、飛ばせ飛ばせムードのこの中ではどうにもならないとあきらめられたようでした。

スカイラインコースも、せっかく野沢へ来たのだからと降りることになりました。「ここは上級者コースです。…ご遠慮下さい。例え上級者であっても…それはあなたご自身の責任です」のエンドレステープがやけに耳につくのでした。「最初が急なだけやって」との森川先輩の言葉に滑りだしたものの、一難去ってまた一難の連続。どうしようもなくなってブルークボーゲンに徹すれば「あれ、初級が入ってきてるよ」の聲が突きささってくるし。「今時はね、女が度胸なの！」と声援されたって…。お邪魔虫のありったけをしてやっとゴール。思わず「シーハイ！」でありました。

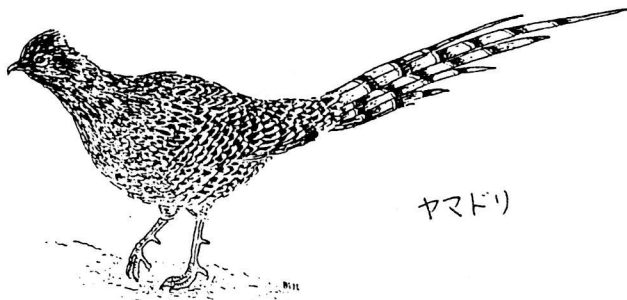
またもゴンドラで頂上へ。これで勝手が分かったとばかり、ますますスピードランサーに拍車がかかり、私は「3時間で登れる所を4時間かかって楽しめるのが山の良さなんだよ！」と嘯いて、じっと我慢の安全スキーに努めるのでありました。ようやく午前券が切れ、これで一安心と思ったら、シュナイダーコースの上部から、ユートピアゲレンデを迂回するコースを降りようと…最後の最後まで泣く思いをしました。

「これで、野沢のビッグコースを2本降りたじゃん！」そんなあ…。ワンゲルOBの空恐ろしさが身にしみ、この人達に絶対年金はいらん！と、五体満足に帰れる喜びに浸るのみでありました。

さて来年。食事情から、もろもろからやはり野沢がよからう。こんな年度末よりもっと早めに、せめて二泊とか…前向きのご要望の数々。教祖様のスキーも早々と担保物件に。

そうそう、早川さんとも帰りがけに再会できました。彼によく似た男の子二人と、ホッとした表情の奥さんと。OBスキー合宿は、考えようによっては山より取り組み易い行事かも。

バス組と、エスティマ組に別れ、バイバイ。部室発、部室着が現役編なら、現地集結、現地解散がOB編。この輪をもっと広げてやっていけたら…そんな夢も膨らんだOBスキー合宿でした。



ヤマドリ